論文の要旨

詩話は宋代に盛行した詩論であるが、詩に関する内容を多岐にわたって断片的に綴った随筆や雑記ともいうべきものが中心で、体系的、理論的な詩話が出現するのは南宋に入ってからのことである。本論文は、特に南宋において編纂された主な詩話を採り上げ、各詩話の内容の比較検討、および詩話が出版された地域とその人脈を精査することを通じて、南宋期に理論的な詩話がいかなる背景のもとに出現したのかという問題を解明しようとするものである。全体は序論と結論を除き、以下の五つの章により構成されている。

第一章「『詩話総亀』諸本をめぐる問題」では、南宋の紹興年間に刊行された『詩話総亀』を採りあげる。該書は複雑な経緯を辿って成立し、増補、改編された可能性があることから、現存する諸本を精査し整理した結果、百巻本と六十巻本の二系統があり、百巻本は月窗本と明抄本の二系統に分けられ、抄本はさらに数種類あったと推測されること、各本は構成や内容が少しく異なるだけでなく、複数の系統の中間に位置する本、あるいは複数の系統が組み合わさった本があるなど、複雑な様相を呈していることが確認された。その上で氏は、六十巻本が先行する百巻本を再編集した形跡が認められること、『詩話総亀』は南宋期の段階で複数回手が入れられている可能性があることを指摘する。

そうした改編の背景として、南宋期には書籍を再編集して刊行する例が多いことを挙げ、『詩話総龜』の刊行もこれに連動したものであるとする。さらには『詩話総亀』以後、詩話が南宋期に刊行され続けることが、詩話というジャンルの確立に影響を及ぼした可能性を指摘する。

第二章「詩話に於ける蘇軾の受容―膨張と変容―」では、北宋の詩人蘇軾に関する言説は筆記や題跋などの形でさまざまに記録されているが、それが詩話に取り込まれていく中で、蘇軾以外の人物の言説まで蘇軾の言葉として記録されていく様相を明らかにしている。

蘇軾の作品は生前から書坊が無断で出版し、他人の作が紛れ込む例もあることが先行研究ですでに指摘されているが、本章では具体的に詩話の例、特に『詩話総亀』などの、様々な詩話から記事を集めた大型の詩話総集において蘇軾自身の言葉にすりかわっていく例を挙げ、それらの記述が明代以降、蘇軾の文集や題跋集に蘇軾の作品として収録されていくと論じている。

その背景には、南宋における商業出版の隆盛、作詩人口の増加と詩派の形成があるとする。特に南宋初期に一世を風靡した江西詩派の影響により、蘇軾の文集の需要が高まり、詩話でも多く言及されるようになる。こうした需要を見込んで詩話や実用本を出版した中心は福建建陽の書坊であり、『詩話総亀』はこの建陽で刊行されている。氏は詩話というジャンルの確立のみならず、本文の変容にも出版の影響が想定されることを併せて指摘している。

第三章「『詩人玉屑』編纂意図について」では、南宋後期に編纂された詩話『詩人玉屑』は、『詩話総亀』の直後に編まれた詩話である『苕渓漁隠叢話』を簡約にした作詩の指南書とされるが、単なる簡約版ではなく、記事の取捨選択には一定の基準を看取できるとし、その編纂意図の解明に挑んでいる。

『詩人玉屑』前半には南宋の体系的な詩論として知られる厳羽の『滄浪詩話』を全篇収載し

ているが、他書からの記事でも『滄浪詩話』を意識した記述が選択されているとする。また、『滄浪詩話』の先駆とされる『歳寒堂詩話』に類似した論を展開する記事も採録されており、編者が両書の重要性を理解していた可能性を指摘する。

併せて、『苕溪漁隠叢話』から採録した記事以外は主として厳羽や朱熹、楊万里などの説であること、これらの詩人は朱熹の関係者であること、『詩人玉屑』の編者魏慶之や序を書いた黄昇、厳羽らはいずれも朱熹の活動拠点である建陽周辺の出身であることに触れ、魏慶之や黄昇が厳羽の『滄浪詩話』やその先蹤である『歳寒堂詩話』の詩論を重視した背景には、こうした地縁による交友関係が影響していると論じている。

第四章「歳寒堂詩話流伝の範囲とその背景」では、『詩人玉屑』への影響が認められる『歳寒堂詩話』について、作者の交友関係を辿ることにより南宋期における流伝の範囲と背景を探る。

作者である張戒は朱熹の父である朱松と詩文を介した交友関係にあった。朱熹も張戒の文集に関する情報を把握していたことから、『歳寒堂詩話』を目にした可能性があるとする。また『朱子語類』を見ると、朱熹が張戒に言及する際の記録者は弟子の包揚であり、包揚にとって張戒は地元の著名人で、ひときわ関心を持っていたことが窺われることから、『歳寒堂詩話』の流伝に包揚が関わった可能性があるとする。包揚は厳羽の師でもあり、厳羽は『詩人玉屑』の編者である魏慶之や序を書いた黄昇と交遊があった。これらを併せ考えれば、厳羽は包揚を介して『歳寒堂詩話』を目にした可能性があり、『滄浪詩話』のような理論的な詩話が生まれる背景には、建陽を中心とする朱熹とその人脈、出版文化が関わっていることが推測されるとする。

第五章「歳寒堂詩話先蹤論再考」では、厳羽が『歳寒堂詩話』を目にした可能性を人間関係から考察した前章に対し、『滄浪詩話』と『歳寒堂詩話』との比較に加え、朱熹や厳羽の周辺人物の詩説を併せ検証し、厳羽が詩説を共有した範囲や『歳寒堂詩話』を目にした可能性のある人物をさらに明らかにしようと試みる。

江西詩派に対する批判は南宋期にはよく見られるものの、蘇軾・黄庭堅に対する評価は分かれるところがあるが、『歳寒堂詩話』と『滄浪詩話』は蘇黄を批判する点で共通している。さらに包揚の息子であり厳羽の兄弟弟子である包恢の文章には、厳羽が蘇黄を批判的に論じる際に使用する語が見られるなど、厳羽と近い認識を持っていたことが窺われるとする。また『詩経』大序の扱いに着目すると、朱松の又従兄弟である朱弁の書いた『風月堂詩話』には『歳寒堂詩話』に近い内容が見られ、朱熹や包恢、厳羽にも張戒に通じるところがあるとする。以上のことから、厳羽と包恢は包揚を通じて、張戒や朱熹、朱弁らの詩論を継承・共有していた可能性が高いことを論じている。

そして「結論」において、『滄浪詩話』のような理論的な詩話は、建陽の地を中心とした文化人のコミュニティとその中での議論を背景に生まれてきたと結んでいる。